

小林秀雄著『本居宣長』: 二十九章主題『此間(ここ)の言』(訓讀)の發明。その漢文の格(さま:漢文訓讀)からの脱出(『阿禮:誦習の古語』表記)こそが『古事記』その「關係論」的纏め。

P274: ①『書籍(ふみ:漢書)』(物:場 C') ②上代日本人(物:場 C') ③『古事記傳』(物:場 C') ④言語經驗(物:場 C') ⑤上代文化(物:場 C') ⑥『古事記』(物:場 C') ⇒からの關係: 『①と云ふ物渡り參來(まいき)て』幾百年の間、何とかして漢字で日本語を表現しようとした②の努力、惡戰苦闘と言つていいやうな經驗[とは、『此間(ここ)の言(訓讀)』の發明及び、P278『漢字は日本語(口誦のうちに生きてゐた古語)を書く爲に作られた文字ではない』の反省を指す]。これ(惡戰苦闘)を想ひ描く事が、⑨にとつては、③を書くといふその事であつた。⑨は、「⑦:上代人の、この④[上記『此間(ここ)の言(訓讀)』の發明及び、云々]が、⑤の本質を成し、その最も豊かな鮮明な產物[漢文の格(さま:漢文訓讀)脱出]が⑥であると見てゐた」(D1の至大化) ⇒ ⑧:上代文化(⑦的概念F) ⇒ E: その[『此間(ここ)の言(訓讀)』の]複雜な『文體(かきざま)』を分析して、その『訓法(よみざま)』を判定する仕事は、上代人の努力[『此間(ここ)の言(訓讀)』]の内部に入込む道を行つて、⑤に直に推參するといふ事に他ならない、と」(⑧への距離獲得:Eの至大化) ⇒ ⑨宣長(△枠): ①⑥への適應正常。

P278: ①日本語(物:場 C') ②『古事記』(物:場 C') ⇒からの關係: ①に關する、⑤の「③:最初の反省[口誦のうちに生きてゐた古語が、漢文の格(さま:漢文訓讀)に書かれると、變質して死んで了ふ]が、②を書かせた」(D1の至大化) ⇒ ④:『日本の歴史』(③的概念F) ⇒ E: ④は、外國文明の模倣によつて始まつたのではない。模倣(漢文訓讀による漢文學習)の意味を問ひ、その答へ(即ち③)を見附けたところに始まつた、②はそれを證してゐる。宣長はさう見てゐた」(④への距離獲得:Eの至大化) ⇒ ⑤日本人(△枠): ①②への適應正常。

からの關係(D1の至大化)

* 「①と云ふ物渡り參來(まいき)て』幾百年の間、何とかして漢字で日本語を表現しようとした②の努力、惡戰苦闘と言つていいやうな經驗[とは、『此間(ここ)の言(訓讀)』の發明及び、P278『漢字は日本語(口誦のうちに生きてゐた古語)を書く爲に作られた文字ではない』の反省を指す]。これ(惡戰苦闘)を想ひ描く事が、⑨にとつては、③を書くといふその事であつた。⑨は、「⑦:上代人の、この④[上記『此間(ここ)の言(訓讀)』の發明及び、云々]が、⑤の本質を成し、その最も豊かな鮮明な產物[漢文の格(さま:漢文訓讀)脱出]が⑥であると見てゐた」(D1の至大化)。

* 「①に關する、⑤の「③:最初の反省[口誦のうちに生きてゐた古語が、漢文の格(さま:漢文訓讀)に書かれると、變質して死んで了ふ]が、②を書かせた」(D1の至大化)。

